

Robert Burnsの模倣の諸相

—Ballad、Fergusson、Barbourからの 模倣とその意味を考える—¹

中 島 久 代

2009年はスコットランド詩人Robert Burns (1759-96) の生誕250周年に当る。祖国スコットランドは言うに及ばず、世界各地でバーンズの功績を讃える様々な企画が予定されている。しかし、バーンズはスコットランド文学史において、生存中も死後200年を経た現在でも、その評価がやっかいな詩人である。²バーンズの従来の代表的な評価を表す言葉は「天賦の才の農民詩人」であろう。³スコッツ語で書かれているという難しさはあるにせよ、音読すれば調子の良さが実感できる作品のスタイルと、蚤、ネズミ、野菊、犬、ジーンやメアリなどのありふれた女性の名前が題材となっているという作品への親しみやすさによって、バーンズのこの評価は現在でも根強い。しかし他方で、バーンズは「MacDiarmid、Scottと並んで議論の多い詩人」であり、⁴「一見素朴に見えながら実は複雑な詩人」である。⁵このような従来の詩人のイメージを逆転させる評価が納得されるのは、バーンズの作品をスコットランド詩史というコンテキストに置いて読む時である。バーンズはスコットランド文学の様々な先人たちのスタイルや表現をふんだんに模倣し、その模倣と逸脱がバーンズ自身のアイデンティティを形成している。このことを示すために、Ballad、Robert Fergusson (1750-74)、John Barbour (c.1320-95) からバーンズが行った模倣とその意味を検証する。

1 バーンズのバラッド詩

バーンズが生きた18世紀後半は、バラッド蒐集熱が高まった時代と一致している。以下は18世紀に刊行されたバラッドを含む代表的な編纂集である。

(1) Watson, James, ed. *Choice Collection of Comic and Serious Scots Poems both Ancient and Modern*. 3vols. 1706-11.

(2) Ramsay, Allan, ed. *The Evergreen*. 2vols. 1724.

- (3) Ramsay, Allan, ed. *The Tea-Table Miscellany*. 4vols. 1724-37.
- (4) Percy, Thomas, ed. *Reliques of Ancient English Poetry*. 1765.
- (5) Herd, David, ed. *Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, Etc.* 2vols. 1776.
- (6) Johnson, James, ed. *The Scots Musical Museum*. 6vols. 1787-1803.

バラッド蒐集熱の高まりの火付け役となったのは、Thomas Percy (1729-1811) が編纂した *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) であり、バラッドの匿名性が生み出す物語の精神と技法がロマン派詩人たちに多大な影響を与えて、バラッド・リバイバルを生み出した。同時に、この時代のスコットランドは、1707年1月28日にアン女王によってイングランドとスコットランドの議会合同法が発布されて以降、スコッツ語で話し英語で書くという言語の分裂にさらされており、スコットランドの文人たちは祖国の伝統文学と民衆の伝統文化を活性化させることで、議会の合同によって失われたアイデンティティを復活させようとする気運の中にあり、スコットランドの詩やバラッドの編纂集を次々と刊行した。David Herd (1732-1810) 編纂の *Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, Etc.* の第1巻は1769年に、2巻同時には1776年に刊行された。James Johnson (c.1753-1811) 編纂の *The Scots Musical Museum* 6巻は1787年から1803年にかけて刊行され、バーンズは第2巻から第5巻まで寄稿者兼編者として関わった。これらのバーンズの存命中の編纂集に加えて、ハード以前の、スコッツ語詩のリバイバルに道を開いたいくつかの編纂集もバーンズとバラッドの関係を形成する要因とみなすことができる。それらは、James Watson (d.1722) によって1706年から1711年にかけて、スコッツ語による詩、フォークソング、バラッドなどを集めて刊行されたスコットランド初の編纂集 *Choice Collection of Comic and Serious Scots Poems both Ancient and Modern* 3巻、1600年以前のスコットランド詩を収録して1724年に出された Allan Ramsay (c.1686-1758) による *The Evergreen* 2巻、および、1724年から37年にかけて刊行された *The Tea-Table Miscellany* 4巻などである。このような外的要因に加えて、バーンズ自身がまだバラッドをうたい聞かせるという環境の中に育ったことは、バーンズがバラッドと関わる決定的な要因だった。家庭で母親と使用人から聞いたバラッドの様々の伝承や物語によって、郷土に伝わる民衆の物語詩にバーンズは目覚めたという。⁶バーンズがバラッドの模倣詩を創作する基盤は十分に整っていた。

バーンズとバラッドについては、たいへん有用な研究ノートがある。Franklyn Bliss Snyder, 'Notes on Burns and the Popular Ballads', *The Journal of English and Germanic Philology*, vol. 17(1918) 2: 281-88 である。バーンズがバラッドをどのように模倣したのかについて、スナイダーはバーンズの作品をAからCの3つのカテゴリーに分類している。下の表中および以降の伝承バラッド作品名後のカッコ内のアルファベットと数字は、F. J. Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads*, 5vols (Dover, 1965: rpt. 2003) (以下ESPbと略す)

を出典としたチャイルド番号と版を示している。

分類	バーンズ作品 (作品名はSnyderのまま)	元歌 (作品名はSnyderのまま)
A	Lord Gregory	The Lass of Roch Royal (76)
	Kellyburn Braes	The Farmer's Curst Wife (278)
B	The Five Carlins	tune: Chevy Chase (162B)
	John Barleycorn	stanza: Chevy Chase (162B)
	Grim Grizzel	stanza: Chevy Chase (162B)
	Elegy on Willie Nicol's Mare	incremental repetitionを模倣
	The Fete Champetre	第1スタンザに模倣の痕跡
C	The Duchess of Gordon's Reel Dancing	Tam Lin (39A)
	Highland Harry The Last Braw Bridal	"When bells were rung and mass was sung, / And a' folk bound to bed."のような常套表現の模倣
	John Anderson, My Jo	Lady Elspat (247)
	The Rantin Dog	Fair Annie (62E)
	My Hoggie	The Wife of Usher's Well (79A)
	The Bonie Lad that's Far Awa	The Elfin Knight (2A)
	Lady Mary Ann	Sir Hugh (155A) The Bonnie House o Airlie (199B)
	Charlie He's My Darling	Glasgerion (67A)
	The Lass that Made the Bed	King Henry (32)
	It Was A' for Our Rightfu' King	Young Hunting (68A)
	Young Jessie	Rare Willie Drowned in Yarrow (215)
	O, Let Me in This Ae Night	Erlinton (8A)

まず分類Aとして、バーンズが伝承バラッドを忠実に模倣して語り直しているものとして、'Lord Gregory'と'Kellyburn Braes'の2作品が挙げられている。「ロード・グレゴリー」は'The Lass of Roch Royal'(Child 76)の、「ケリバーンの丘の農夫」は'The Farmer's Curst Wife'(Child 278)からの模倣である。分類Bでは、リフレインや常套表現などのバラッドの様式が模倣されている作品として、'The Five Carlins'、'John Barleycorn'、'Grim Grizzel'、

'Elegy on Willie Nicol's Mare'、'The Fete Champetre'の5作品が挙げられている。これらについては、どのような伝承作品からどの程度の摸倣がなされているかの詳細は述べられておらず、摸倣のポイントのみ解説されている。分類Cには、バラッドの特徴的な表現が1箇所でも使われているものとして12作品が挙げられている。例えば'The Duchess of Gordon's Reel Dancing'には" She kiltit up her kirtle weel."という表現があるが、これは伝承バラッド'Tam Lin'(child 39A)にある"Janet has kilted her green kirtle"からの摸倣である。以上、スナイダーが分類しているバーンズの作品は合計20作品を数える。バーンズには広い伝承バラッドの知識があったことがわかるが、それはスナイダーが言及したバラッドに限られるのではない。1790年にMrs. Dunlop(生没年未詳)という人物へ宛てた書簡に、素朴でありながら心に訴える古いスコットランドのバラッドとして'Mary Hamilton'(Child 173)の中のひとつのスタンザを引用していることや、¹1793年にGeorge Thomson(1754-1851)へ宛てた書簡では、'Hardiknute'などの他の詩人が書いたバラッド詩に混じって、'Gil Moris'(Child 83)と'Barbara Allen'(Child 84)を挙げて、叙情詩との違いを述べていることにもうかがえる。²実は、スナイダーが挙げているバーンズの摸倣作品は、ほとんどが'poem'ではなくて'song'に入るものである。ソングに伝承バラッドからの摸倣を取り入れた背景には、旋律と詩のバランスについてバーンズなりの主張があったと思われるが、ここでは旋律の問題は触れないでおく。これらを踏まえてスナイダーの分析から解することは、バーンズにとっては十分馴染んで、表現の貯蔵庫にも等しかった伝承バラッドから様々な典型的な表現や常套句を、ソングとバラッド詩の創作のために自在に取り入れているという事実である。

しかし厳密に言えば、バーンズのバラッド詩には、直前に述べたような意味でのバラッドの無意識的な摸倣と、バーンズの意図が明確に存在する摸倣の2種類がある。スナイダーが分類Bに挙げた'John Barleycorn, A Ballad'(1783)は無意識的な摸倣と言ってよい。ジョン・バーレイコーンとは、ビールやウイスキーの醸造に使う大麦の麦芽、モルトを擬人化した呼び名であり、ジョン・バーレイコーンが祖国の英雄に擬せられて、権力者から命を奪われ土に埋められても春になって復活し、秋には収穫されて再び命を奪われ、今度はウイスキーの原料となってしまうが、大胆さと冒険心と喜びはウイスキーを飲んだ人間に伝わるのだという、不滅のヒーロー伝説に仕立てられている。感情表現を抜いて物語に徹している点と、基本的にはabcbの韻を踏むバラッドスタンザで創作されている点において、典型的なバラッドの枠組みが構築されているが、これらに加えて、伝承バラッドの常套表現を巧みに利用している点が興味深い。以下にバーンズの作品と伝承バラッドを並べて、バーンズの摸倣を示す。

(1) 'John Barleycorn, A Ballad'

1

There were three kings into the east,
Three kings both great and high;
And they hae sworn a solemn oath
John Barleycorn should die.

(2) 'The Cruel Brother' (11G)

There was three ladys in a ha,
Fine flowers i the valley
There came three lords among them a',
Wi the red, green, and the yellow (st. 1)

[From *ESPB*]

(3) 'Jock o the Side' (187B)

15

Then let us toast John Barleycorn,
Each man a glass in hand;
And may his great posterity
Ne'er fail in old Scotland!

They hae gard fill up ae punch-bowl,
And after it they maun hae anither,
And thus the night they a' hae spent,
Just as they had been brither and brither.
(st. 37)

[From *The Poetical Works of Robert Burns*,
vol. 1, with Memoir, Critical Dissertation,
and Explanatory Notes by the Rev.
George Gilfillan (Edinburgh: James Nichol,
1856)] (以下*Poetical Works*と略す)

[From *ESPB*]

「東方に三人の王様がいました」というバーンズの出だしは、例えば、伝承バラッド'The Cruel Brother' (Child 11G) の出だしのスタンザ「娘が三人広間にいました／谷間にきれいな花が咲き／男が三人やってきました／赤と緑と黄の服を着て」という、バラッドには常套的な様式化された出だしと、悲劇を予感させるミスティック・ナンバーの3がきっちりと模倣されている。また、最終15スタンザの「それではジョン・バーレイコーンのために乾杯をしよう。／ひとりひとりが手にグラスを持って、／願わくば彼の偉大な子孫が／古きスコットランドに絶えませぬようにと。」というヒーローを祝福する結びの部分は、例えばボーダー・バラッド'Jock o the Side' (Child 187B) で、仲間の救出に無事成功したアウトローたちが、命をはった仲間を乾杯でねぎらい祝福する最終場面、「パンチボールになみなみ注いで／何杯も何杯も飲みました／兄弟の盃を交わすうち／夜は更けてゆきました」の場面構成が模倣されている。バラッドの枠組みに複数の伝承バラッドの常套表現を自在に持ち込んで、素朴で愉快な大麦の物語が創作されている。加えて、この作品にはバーンズのテーマがある。自ら作品に付けたコメントでは "This is partly composed on the plan of an old song known by the same name." と

バーンズは述べており、植物の靈魂についての広く知られた神話をバーンズ流に語るがこの作品の創作の目的だったと理解される。¹⁰神話の枠組みを聞きやすくないやうなバラッドのスタイルで構築し、人々が馴染んだ常套表現を利用して語り直したのである。このような、神話の改作としての伝承バラッドの模倣からは、伝承バラッドをうたい聞く人々が持っていた、文化を伝承するという行為そのものへの共感と、その行為に本質的に内在する遊戯的な精神、つまり、バーンズのバラッド的素養とも言えるものが読み取れる。

次に意図的な模倣の例として、スナイダーの分類Aから‘The Carle of Kellyburn Braes’ (1794)を読む。前述したように、この作品は伝承バラッド‘The Farmer’s Curst Wife’ (「農夫の悪妻」、Child 278)をかなり忠実に模倣したものである。

(1) ‘The Carle of Kellyburn Braes’

14

<p>1</p> <p>There lived a carle on Kellyburn braes, (Hey, and the rue grows bonnie wi’ thyme, And he had a wife was the plague o’ his days; (And the thyme it is wither’d, and rue is in prime.)</p>	<p>‘I hae been a devil the feck o’ my life; (Hey, and the rue grows bonnie wi’ thyme, But ne’er was in hell, till I met wi’ a wife; (And the thyme it is wither’d, and rue is in prime.)</p> <p>[From <i>Poetical Works</i>, vol. 1]</p>
--	--

11

(2) ‘The Farmer’s Curst Wife’ (278A)

<p>The devil he swore by the edge o’ his knife, (Hey, and the rue grows bonnie wi’ thyme, He pitied the man that was tied to a wife; (And the thyme it is wither’d, and rue is in prime.)</p>	<p>There was an old farmer in Sussex did dwell, (<i>Chorus of whistlers</i>) There was an old farmer in Sussex did dwell, And he had a bad wife, as many knew well. (<i>Chorus of whistlers</i>) (st. 1)</p>
---	--

12

<p>The devil he swore by the kirk and the bell, (Hey, and the rue grows bonnie wi’ thyme, He was not in wedlock, thank heaven, but in hell; (And the thyme it is wither’d, and rue is in prime.)</p>	<p>‘I have been a tormentor the whole of my life, But I neer was tormented so as with your wife.’ (st. 11)</p> <p>[From <i>ESPB</i>]</p>
--	--

(3) 'The Elfin Knight' (2G)

'Can you make me a cambrick shirt,
 Parsley, sage, rosemary and thyme
 Without any seam or needle work?
 And you shall be a true lover of mine (1-4)

[From *ESPB*]

伝承バラッド「農夫の悪妻」では、農夫から悪妻を譲り受けた悪魔が苦勞して背中に悪妻を担いで家に戻ると、悪妻は悪魔の子供たちを蹴り、頭を殴り、悪魔を壁にぶちあて暴力三昧にふるまう。悪魔は農夫に悪妻を返しに行き、最終スタンザでは「今までさんざ 人間ひとを苦しめる役は演じたが／おまえさんの女房から苦しめられるほどの役はなかった」と弱音を漏らすという滑稽な物語である。バーンズの作品でも、ケリバーンの農夫から悪妻を譲り受けた悪魔は、貧乏な行商人よろしく悪妻を家へと運んでいったが、悪妻は気が狂った熊のように50人の悪魔の警護隊をひとり残らず殴ってしまう。悪魔はこの悪妻に縛られていたケリバーンの農夫を哀れに思い、しかし悪魔自身の結婚生活も地獄の生活だと気づき、農夫に悪妻を返しに行く。最終14スタンザの台詞は「おれは生涯悪魔だったが／ヘンルーダとタイムは青く茂っている／この悪妻に会って初めて 地獄を見た／タイムは枯れても ヘンルーダは咲いている」(拙訳)というものである。悪魔が人間の悪妻に降参するという滑稽なストーリーはまったく同じだが、第11と第12スタンザに見られるように、バーンズの悪魔はナイフの刃にかけてケリバーンの農夫に同情し、教会と鐘にかけて農夫は地獄の生活をしていたのだと悟り、悪魔の軟弱さと卑小さが一段と強調されている。さらに、この作品では各スタンザの2行目と4行目に置かれたリフレインが目立つ。「ヘンルーダとタイムは青く茂っている」と「タイムは枯れても ヘンルーダは咲いている」というリフレインは、一見すれば、悪魔の滑稽で哀れなストーリーに直接関係しない、植物の名前を羅列したリフレインを物語に挿入することによって、伝承バラッドのリフレインのような、存在するものの抱える悲しみを自然の中に包み込んで癒す役割を果たしているように思われる。実際、ストーリーに直接関係のない植物名が並べられるリフレインは伝承バラッドに特有のものである。例えば'The Elfin Knight'(Child 2G)のリフレインは「パセリ セージ ローズマリーにタイム」という植物名の羅列から成っており、妖精の男と人間の女のかなわぬ恋の痛みを癒す効果をもたらしている。しかし、このバーンズのリフレインにスコットランド格言“Rue and thyme grow both in one garden”(ヘンルーダとジャコウソウは両者とも同一の畑に生える)を並べると、このリフレインが単なる伝承の模倣ではなく、バーンズの意図的な技巧であることが判明する。¹¹ *The Oxford Dictionary of English Proverbs*

によれば、この格言の意味するところは、“A persuasion to repent and give over an attempt before it be too late, alluding to the sound of the two herbs here named.”である。“Rue”はヘンルーダと後悔の意味を持ち、“thyme”はその音から“time”をも連想することから、この格言は「後悔先にたたず」に相当する。バーンズは伝承バラッドのリフレインの模倣に見せかけながら、「後悔先にたたず」という格言を暗示するリフレインを創作して、悪魔とケリバーンの丘の農夫の哀れさに物語の最初から最後まで教訓を垂れているのである。教訓性という特色は物語に徹する伝承バラッドにはないものであり、職業詩人の創作によるバラッド詩ないしはブロードサイド・バラッドには、物語の内容から聴衆に訓戒を垂れるという出だしや結びが頻繁に登場する。このような教訓性を考慮に入れば、このリフレインによって物語全体は明らかにセンチメンタルに変質されている。リフレインがセンチメンタリズムを助長しているとすれば、悪魔がナイフの刃にかけてケリバーンの農夫に同情したり、教会と鐘にかけて地獄の生活を悟ったりする下りも、単なる誇張表現ではなくて、悪魔の、ひいてはバーンズの宗教に対する軟弱でセンチメンタルな態度を暗示するものではないか。この作品のみからバーンズの宗教観というテーマを掘り下げることはできないが、Edwin Muir(1887-1959)が*Scottish Journey*(1935)の中でしきりに繰り返す、John Knox(c.1514-72)による宗教改革以降のスコットランドにおける信仰の質の変化とバーンズ批判は、このようなバーンズの模倣における物語の変質をも指すのではないか。ミュアは次のように語っている。

“That genius [the genius of the Border people] was partly heroic and partly poetical, and its most essential expression is the ballads, which form the greatest body of Catholic poetry in Scottish literature, greater even than that of Henryson and Dunbar. These ballads continued to be sung and written long after the Reformation without any fundamental change of spirit, so that it is easy now to mistake an eighteenth-century ballad for a sixteenth-century one. In calling the ballads Catholic I am using that term very loosely, and mean by it nothing more than that the ballads possess a quality which the rest of Scottish poetry after the Reformation lacks. Burns is a very Protestant poet. Even in his remoulding of old folk songs he never goes back in sentiment past the Reformation. He certainly had no affection for the God of Knox, yet he himself had no other, except on occasion an eighteenth-century abstraction. His ribaldry, blasphemy, libertinism and sentimentality are all Protestant, and quite narrowly so.”

[From Edwin Muir, *Scottish Journey* (Edinburgh: Mainstream, 1935) 45-46]

ミュアはバラッドを中世スコットランド詩人ヘンリソンやダンバーよりもさらに偉大なスコッ

トランド文学の、カトリック伝統詩の最大の集積であると規定する。その理由は、バラッドは宗教改革後も長く改革以前の精神を変えなくうたわれてきたからである。これに対して、バーンズの模倣が表現しているのはプロテスタント的な精神であり、彼の作品に見える卑猥、冒瀆、放蕩、感傷性はすべてプロテスタント的である、と断言して憚らない。バーンズがプロテスタント的であるかどうかを言うことは私には難しい。しかし、伝承バラッドとの比較においてバーンズの模倣作品に見えるセンチメンタルな傾向は否めない。

2 ファーガソンからの模倣と逸脱

バーンズのセンチメンタルな傾向にこだわりつつ、ロバート・ファーガソンからの模倣詩に目を転じたい。18世紀のスコットランド文学は主としてスコッツ語を使って詩を作るスコッツ語詩人たちと、イングランド風に同化することを好んだ文人たちに二分される時代だった。バーンズはスコッツ語詩人ファーガソンに傾倒したが、模倣の才に恵まれた彼はファーガソンの‘The Farmer’s Ingle’（「農夫の炉辺」、1773）にも模倣と逸脱を企てている。¹²この作品のテーマは、スコットランドのアイデンティティの危機の時代にあって、スコットランドの真の強さが農民の持つ徳と彼らの肉体の逞しさにあることを示すことである。自然をさりげなく描写し、田舎の良さを賞賛し、ひるがえって豪華な生活をやんわりと批判し、愛国心を声高に叫ぶでもなく、道徳的な説教を垂れることもない。いつの時代の読者にも、行為と精神のシンプルさこそが何よりも尊いことを伝える作品である。出だしの部分を読んでみる。冒頭のエピグラフはローマ詩人ウェルギリウスの「牧歌」第5番からの引用である。ドライデンの英訳での大意は「二つの盃をスパークリングワインで満たそう／キオス島の葡萄からできた豪華なワインで／きみに注ごう この飲み物は君のものだ／冬には暖炉の前で心暖まる酒盛りとなるだろう／夏には木陰で」（拙訳）である。

‘The Farmer’s Ingle’

Et multo in primis hilarans convivia Baccho
Ante focum, si frigus erit, (si messis, in umbra,
Vina novum fundam calathis Ariusia nectar)

Virg. Buc.

Whan gloming grey out o’er the welkin keeks,
Whan Batie ca’s his owsen to the byre,
Whan Thrasher John, sair dung, his barn-door steeks,
And lusty lasses at the dighting tire:

What bangs fu' leal the e'enings coming cauld,
 And gars snaw-tapit winter freeze in vain;
 Gars dowie mortals look baith blyth and bauld,
 Nor fley'd wi' a' the poortith o' the plain;
 Begin, my Muse, and chant in hamely strain. (1-9)

[From *Weekly Magazine or Edinburgh Amusement* (Edinburgh, 1773), Ian Lancashire, ed., *Representative Poetry Online*, 25 June 2008 <<http://rpo.library.utoronto.ca/poem/808.html>>]

「農夫の炉辺」

空に灰色の闇が迫るころ
 牧羊犬が牛を小屋へと追いたてるころ
 農夫のジョンが 疲れ果てて 小屋の戸口を閉め
 きれいな娘たちも 初穀選りに疲れるころ
 忠実にやって来る 夜の寒さを忘れさせ
 雪混じりの冬の嵐を空しくし
 素朴なものたちの貧しさからは逃げだせずとも
 哀れな人間を愉快にも大胆にも見せてくれるうたを
 ぼくの詩神よ いつもの調子で さあうたってくれ (拙訳、1-9)

この作品はバーンズの'The Cotter's Saturday Night' (「小作人の土曜の夜」、1785-86) の元歌とされている。農作業から解放された農夫のささやかな頼いの時を題材にしていることは同じであるが、作品の展開はファーガソンとバーンズでは大きく異なっている。まず、エピグラフからバーンズの変質が明らかになっている。引用はThomas Gray(1716-71)の"Elegy Written in a Country Churchyard" (1751) の第8スタンザからであり、「人のための骨折り、質素な喜び、埋もれ生きる宿命を／野心あふれる者に、あざ笑わせてはならない。／軽蔑の笑みを浮かべて、貧者の短くて素朴な一代記を聞くようなまねを／尊大な者にさせてはならない。」というモットーが伝えているのは諸行無常である。これに続いて、バーンズの作品は個人への献辞から始まっている。

'The Cottar's Saturday Night'

INSCRIBED TO R. AIKEN, ESQ.

'Let not ambition mock their useful toil,
Their homely joys, and destiny obscure;
Nor grandeur hear with a disdainful smile
The short and simple annals of the poor.'

GRAY.

My loved, my honour'd, much respected friend!
No mercenary bard his homage pays;
With honest pride, I scorn each selfish end;
My dearest meed, a friend's esteem and praise:
To you I sing, in simple Scottish lays,
The lowly train in life's sequester'd scene;
The native feelings strong, the guileless ways;
What Aiken in a cottage would have been;
Ah! though his worth unknown, far happier there, I ween! (1-9)

[From *Poetical Works*, vol. 1]

わたしの愛と尊敬に値する、立派な友、エイケンよ。

あなたはさもしい詩人に敬意を払いなどはしない。

わたしは偽りのない誇りで、すべての利己的な目的をあざ笑う。

最高の褒美とは友から受ける尊敬と賞讃。

わたしはあなたにスコットランドの素朴な歌で伝えよう、

世間から離れて生きる貧しい人たちのことを、

そして彼らの生まれながらの強健な感情とその誠実な習慣を。

エイケンが百姓小屋に住むとしたら、それを彼はどう思うだろう。

ああ、彼の値打ちを知る人はないが、彼はそこがどこよりも幸せだと感ずることだろう。

(1-9)

エイケンとは、バーンズの故郷エア出身の法律家、ロバート・エイケンを指す。冒頭から明らかになるのは、バーンズが詩の主人公とは対極にあるインテリ層の読者を意識してこの作品を

書いているのではないかという疑いである。地位も財産もある法律家が百姓小屋に住んだ方が幸せであるという発想は、献辞にはいささかセンチメンタルな誇張が過ぎている。第2と第3スタンザでは、ファーガソンの第一スタンザを偲ばせるような、一日の重労働から解放された農夫の安堵と倦怠感とがゆるやかなテンポでうたわれる。しかし、第4スタンザ35-36行では、“Or deposite her sair-won penny-fee, / To help her parents dear, if they in hardship be.”（それとも家が困っているのなら、その足しにもと、／こつこつ稼いだ給金を大切な両親に預ける気かもしれない。）と語って、牧歌的な生活には不似合いな長女ジェニーの町への出稼ぎという現実を描写する。疲れた農夫の父親が、一週間の締めくくりの仕事として家族へ訓戒を垂れる第6スタンザ46-47行で、“Their master’s and their mistress’s command, / The younkens a’ are warnèd to obey;”（仕えている主人や女主人の言いつけをかたく守り、／一生懸命自分の仕事に精を出し）という台詞や、50-52行の“*And oh! be sure to fear the Lord alway! / And mind your duty, duly, morn an’ night! / Lest in temptation’s path ye gang astray,*”（それにだね。いつも神様を神を畏れ敬うんだ。／朝に夕に絶対お祈りは忘れちゃいけないよ。／そうでなきゃ悪い誘惑に負けてしまうからね。）という台詞は、プロテスタント的な道徳臭を漂わせている。また、ジェニーを訪ねて来た若者が純真素朴な人柄だと描写しながら、第10スタンザ83行の“*A wretch! a villain! lost to love and truth!*”（愛と真実から見放されたならず者）という吐き出すような台詞や、90行目の“*the ruin’d maid*”（墮ちた少女）という激昂した台詞にこもる、娘が必ずや誘惑されて身を滅ぼすと言わんばかりの空想は、行為と精神のシンプルさを讃えたファーガソンの元歌からは大きく逸脱している。このような逸脱の積み重ねは、バーズのセンチメンタリズムを一層読者に印象付けるものである。そして、最終スタンザは、農夫の憩いのテーマからは完全に逸れて、激烈な愛国心の表現で結ばれる。

O Thou! who pour’d the patriotic tide
 That stream’d through Wallace’s undaunted heart;
 Who dared to nobly stem tyrannic pride,
 Or nobly die, the second glorious part,
 (The patriot’s God peculiarly thou art,
 His friend, inspirer, guardian, and reward!)

O never, never Scotia’s realm desert;
 But still the patriot, and the patriot bard,
 In bright succession raise, her ornament and guard! (181-89)

ああ、あなた様、ウォレスの不運にして偉大なる心に流れ、
 愛国の血潮を注がれし神よ。

ウォレスは極悪非道の傲慢に敢えて気高く抵抗しようとした。

さもなければ潔く死を、彼はすなわち第二の栄光の道を選ぶ心構えだった。

(あなた様は特に愛国者の神様であらせられ、

さらに彼の友であり、鼓吹者であり、守護者であり、報いであらせられる。)

ああ、決して、決してスコシアの地をお見捨てにならないでください。

そしてますます愛国者と愛国詩人を、

スコシアの誉れとし、番人として、次々とおはぐみください。

結論としての「愛国詩人を次々と育てたまえ」という祈りは、大きく逸脱したとはいえ、バーンズが元歌とした詩人ファーガソンを忘れてはいないことをアピールするものであろうか。ともあれ、バーンズのこの作品は「農夫の炉辺」を元歌としながら、その逸脱によってバーンズの個性を浮き彫りにしている。この作品のペルソナは、時には主人公の農夫であり、時には信仰を説く説教師であり、時には愛国詩人ともなる。ペルソナは次々と入れ替わり、結末に向かうにつれて語りの調子は間違いなく高められ、田舎の農夫は愛国心を叫ぶ詩人に変質して作品は終わる。このようなペルソナの変化と作品の展開から最終的に見えるものは、エピグラフと第1スタンザにすでに暗示されたように、都市の読者層をターゲットに、農夫の生活の素朴さ、篤い信仰心、激しい愛国心をアピールするというセンチメンタリズムと、バーンズのしたたかな対読者意識である。バーンズは「天賦の才の農民詩人」や「高貴な野蛮人」というレッテルを同時代のインテリ層から与えられて、バラッド蒐集熱の高まりやロマン派の台頭による自然や野蛮さへの彼らの嗜好を体現する存在に祭り上げられた。しかし、ファーガソンの模倣に見るバーンズは、そのような役割を自ら演出していたかに見えるのである。

このようなバーンズの自己劇化としてもう一点気にかかるのは、この作品の詩型の整い方である。ファーガソンの作品は9行スタンザで韻をababcdcddと踏んでいるのに対し、バーンズの作品はababbcbccと韻を踏む'Spenserian Stanza'で構成されている。スコッツ語詩人たちとイングランド風文人たちに二分される時代にあって、英国詩人の型の中で、スコットランド詩人としてのアイデンティティを求める声高な叫びを結びとするというこの作品のスタイルは、バーンズの見せたほころび、または、二つの傾向のどちらにも与する、バーンズのしたたかさを示している。バーンズの模倣詩には、時代の嗜好に迎合する彼の戦略が示されている。

3 バーバーからの詩形の模倣

ファーガソンの模倣で詩型について言及したところで、バーンズの詩型の巧みさについても触れておきたい。スコットランド中世詩人ジョン・バーバーの'The Bruce'の詩型とバーンズの'Tam o' Shanter'(1790)を比較する。

「ブルース」は1375年頃にバーバーによって書かれた、スコットランド文学史上初のスコッツ

語による本格的な長編詩である。ロバート・ブルースことロバート一世が1314年のバノックバーンの戦いでイングランドのエドワード二世に勝利し、祖国の独立を勝ち取るというのが作品のストーリーであるが、“A! fredome is a noble thing,” (ああ！ 自由こそ尊きもの) (Book I: 225)という著名な一行が伝えるように、この作品は、自由の精神の体現者としてのヒーロー像を形成することによって、独立国スコットランドのイメージ形成に大きく貢献した。雄々しさと躍動感に溢れたこの作品のストーリー展開をより一層効果的にしている秘訣は、バーバーの用いた四歩格の二行連句の詩型にある。英雄詩体二行連句に似ながらさらに軽快な四歩格の二行連句の詩型は、作品全体にスピード感を与えている。出だし近くの原文を読んでみる。下線は筆者による。

‘The Bruce, Book I: a Preface’

「ブルース 第1巻 序」

Quhen Alexander the king wes deid
That Scotland haid to steyr and leid,
The land sex yer and mayr perfay
Lay desolat aftyr hys day
Till that the barnage at the last
Assemblyt thaim and fayndyt fast
To cheys a king thar land to ster
That off auncestry cummyn wer
Off kingis that aucht that reawte
And mayst had rycht thair king to be. (37-46)

スコットランドの導き手
アレグザンダー王の崩御のとき
誓って 王の御代から六年以上も
祖国は混乱のありさま
貴族たちは ようやく
一同に会して
祖国を導く王を選びにかかった
先祖が
王家の血筋を引いて
王たるにもっとも相応しい王を (拙訳)

[From Roderick Watson, ed., *The Poetry of Scotland: Gaelic, Scots and English 1380-1980* (Edinburgh UP,1995)]

ところでバーンズは、祖国のヒーローの活写に使われたこの詩型を、シャンタ村の一庶民タムが酒に酔ってバブから帰宅する時に経験した超自然現象をおもしろおかしくうたった詩「シャンタのタム」に利用している。昔馴染みの靴屋のジョニーとしたたか飲んで、風と雨が吹き荒れる真夜中に、タムは愛馬メグに乗って女房ジーンのもとへと帰ってゆくが、アロウェイ教会の廃虚近くまで来ると、奇怪な光景に出くわした。魔法使いや魔女たちが踊っているのだ。彼らが手に持った灯火で、タムはさらに奇怪な幻想を見る。引用下線部の詩型に注目したい。

'Tam o' Shanter: A Tale'

「ジャンタのタム」

By which [a light] heroic Tam was <u>able</u>	その明かりで、勇者タムが
To note upon the haly <u>table</u> ,	目にしたのは、聖餐台の上の、
A murderer's banes in gibbet <u>airns</u> ;	首吊り鎖のついた、殺人犯の骨と、
Twa span-lang, wee unchristen'd <u>bairns</u> ;	二つの、九インチほどの、小さな洗礼前の赤ん坊だ。
A thief new-cutted frae a <u>rape</u> ,	絞首縄から今しがた、切って降ろされたばかりの泥棒は、
Wi' his last gasp his gab did <u>gape</u> : (129-34)	最期の息を吸ったまま、口をあぐり開けていた。

[From *Poetical Works*, vol. 1]

タムが見る幻想は薄気味悪い死体ばかりではない。魔女たちは激しい踊りに汗をかき、服を脱ぎ捨て下着一枚で踊り狂っているが、骨と皮ばかりの老婆たちにまじって若い魔女が登場すると、タムは有頂天になる。

Till first ae caper, syne <u>anither</u> ,	跳んではね、はねて跳ぶ踊りが進むにつれ、
Tam tint his reason a' <u>thegither</u> ,	タムはすっかり無我夢中、思わず大声あげた、
And roars out, 'Weel done, <u>Cutty-sark!</u> '	「うまいぞ、下着のねえちゃん！」
And in an instant all was <u>dark</u> : (187-90)	とたんに、真っ暗闇。

忽然と現れたゴシックの世界とストリップショーまがいの目くるめくような非現実の美女の踊り。酩酊したタムの頭がいっそう混乱するあり様が四歩格の二行連句の詩型によって巧みに描写されている。バーバーの作品は雄々しさと躍動感をこの詩型で盛り上げているが、バーンズはバーバーの詩型を利用することによって、およそブルースと対照的な、タムのだらしなさや庶民性といったものを一層際立たせせることに成功している。

バラッド、ファーガソン、バーバーという3つの視点からバーンズの模倣とそこからの逸脱の技巧を辿ってみると、作品の物語についてはセンチメンタリズムと自己劇化の傾向を持ち、他方詩型については安定したかつ効果的な用い方にこだわるという、バーンズの詩作のスタンスが明らかになる。この傾向は、バーンズが19世紀の技巧派バラッド詩人に先駆ける存在であることを示している。バーンズは決して突然変異的に現れた天才農民詩人ではない。ここに辿ったバーンズの模倣と逸脱の足跡、すなわち、彼の優れた変容力が示す詩人バーンズの本質は、スコットランド文学の先人のさまざまなジャンルとスタイルを模倣し利用し、そこに彼自

身のオリジナリティを付加するきわめて技巧派の詩人としてのそれである。

注

- 1 本稿は、2008年度カレドニア学会第2回研究会（2008年6月28日、神戸海星女子学院大学）において、「バーンズのバラッド詩」と題して発表した原稿を加筆訂正したものである。
- 2 国内の論評では、松井優子「バーンズ以後の文学—「ロバート・バーンズ」という不安」、『ロバート・バーンズ スコットランドの国民詩人』（木村正俊・照山顕人編、晶文社、2008年）に、バーンズが彼以降の文学に与えた影響が現在の評価からの確にまとめられている。
- 3 Gerard Carruthers and Christopher Whyte, 'Enlightenment and Vernacular', *Scottish Literature in English and Scots*, ed. Douglas Gifford, Sarah Dunnigan and Alan MacGillivray (Edinburgh UP, 2002) 112.
- 4 Douglas Gifford and Alan MacGillivray, 'Robert Burns', *Scottish Literature in English and Scots* 146.
- 5 Alan Bold, *A Burns Companion* (New York: Palgrave, 1991) xi.
- 6 James Alison, 'The Ballads', *Scottish Literature in English and Scots* 75.
- 7 De Lancey Ferguson ed., *Selected Letters of Robert Burns* (Oxford UP, 1953) 220.
- 8 Cf. Franklyn Bliss Snyder, 'Notes on Burns and the Popular Ballads' 282.
- 9 バーンズ作品の翻訳は、ロバート・バーンズ研究会編訳『ロバート・バーンズ詩集』（国文社、2002年）に依る。また、伝承バラッドの翻訳は、バラッド研究会編訳、中島久代・薮下卓郎・山中光義監修『全訳チャイルド・バラッド』全3巻（音羽書房鶴見書店、2005-06年）に依る。
- 10 James Kinsley, ed., *Burns Poems and Songs* (Oxford UP, 1969; rpt. 1988) 122.
- 11 薮下卓郎・山中光義編、*Traditional and Literary Ballads*（大阪教育図書、昭和55年）168.
- 12 ファーガソンからの模倣については、次の文献にきわめて詳細な分析が述べられており、参考になる。David Daiches, *Robert Burns* (Andre Deutsch, 1950; rev. 1966) 117-123.